日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.72

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2021 年 12 月発行

ルターの闘い―宗教改革を記念して

もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか

（ローマの信徒への手貝８章 31 節）

宗教改革は 1517 年 10 月 31 日、一介の修道士であったマルティン・ルターがドイツのヴィッテンベルクの教会の扉に「95 か条の提題」を釘で打ちつけたときに始まりました。これは、ローマ・カトリック教会が販売していた贖宥(しょくゆう)券、一般に免罪符として知られるものに反対するものでした。

カトリック教会は、人間が死んだのちに行くところとして天国と地獄以外に煉獄があると教えています。まっすぐ天国に行けるほど素晴らしくもなく、地獄に落ちるほど悪くもない魂は、まず煉獄で苦しい日々を過ごし、償いを果たし終えてから天国に行くことが出来るのだそうです。そうすると、誰しも煉獄で苦しむ期間を短縮して、早く天国に行きたいと願うようになるでしょう。カトリック教会は「キリストや聖人たちが積み上げたあり余るほどの功徳が天に蓄えられていて、それを教皇は引き出すことが出来る。免罪符を買った人は、教皇のはからいで煉獄での苦しみが免除されるのだ」とふれまわりました。

1514年にはドイツでの販売も始まりました。販売人は、「お前さんがたがお金を箱の中に投げ入れると、その音と一緒に霊魂は煉獄から飛びたつのだ」と言って、免罪符を売り歩いたそうです。すると、その結果はどうなるでしょう。信者の間に罪そのものを恐れず、罪の結果としての罰を免罪符によって免れようとする傾向が強くなってきました。

こうしたことを苦々しく思っていたルターですが、まもなく免罪符の販売人が持っていたマニュアルを読んで、驚かされました。そこには、死んだ人のために免罪符を買ったらその人の魂は天国に行く、と書いてあったのです。その人が生前、自分の罪を悔い改めたかどうかは問題にされません。ルターはもはや免罪符を見過ごすことは出来ませんでした。

免罪符は人間の罪を何ら取り去るものではなく、罪の赦しはキリストを信じ、間違いを犯したことを悲しみ、悔い改める信仰によって与えられるべきものだ、…こう信じてルターは「95 か条の提題」を発表したのです。これはたいへん勇気ある行動でした。ルターの書いたものは紙に写され、各地の大学を中心に伝えられて行き、それまで免罪符を有難がっていた人々の間に大きな反響を呼び起こしました。

そうなるとカトリック教会の方でも黙っていません。教皇は、ルターを破門をもって脅しました。教皇が出した宣言は「主よ、起きて、主の事件を裁いて下さい。一匹のいのししが主のぶどう園に侵入しました」に始まり、「もしルターが60日の間に意見を変えないなら、教会から追放されるだろう」というものでした。そしてルターの書いたものが公衆の面前で燃やされました。この知らせはルターに大きな衝撃をもたらしました。しかしルターは屈しませんでした。教皇の宣言を読んで教皇こそキリストに反していると確信したルターは、これを人々の前で焼き捨てました。ついにカトリック教会と袂を分かったのです。

ヴォルムスの国会というところでルターに異端宣告が下されました。そこから帰る途中のルター一行の前に武装した集団が襲いかかり、ルターは連れ去られました。ドイツ中が大騒ぎになりました。しかしこれはフリードリヒ大公という人の差し金で、誘拐事件という大芝居を打ってルターを自分の城の中に保護し、暗殺される危険から救ったのでした。ルターはこのようにして生きのび、プロテスタント教会を建設したのです。

宗教改革から 500 年以上が過ぎ、時代は大きく変わりました。つい４年前には近くの長束修道院で、カトリックとプロテスタントが合同で、宗教改革を記念する集いを開催するまでになりました。しかし、先人たちの闘いが忘れ去られてはなりません、宗教改革記念日は私たちの信仰の原点を思い起こす日、そして神様によって勇気を与えられる時です。

（2021 年 10 月 31 日の礼拝説教より）

牧師　井上　豊